



“ト長調の世界” — ト長調の名曲を探る



プログラム

“調性”を特集する長調のシリーズ、第4回目の今日はト長調で書かれた名曲をお送りします。バッハのブランデンブルク協奏曲第4番はヴァイオリンと2本のリコーダー（フルート）を独奏楽器とした合奏協奏曲（コンチェルト・グロッソ）の形態をとっていますが、第2楽章の高貴な美しさ、ヴァイオリンが協奏曲風に活躍する等、魅力に溢れたバッハの代表的な傑作のひとつです。シューベルトの“幻想ソナタ”は、シューマンが「形式的にも精神的にも最も完全なソナタ」と評した事で知られる名曲です。ハイドンの交響曲第94番は「驚愕」の愛称で知られる作品ですが、静かに始まる第2楽章で主題の終わりに全奏のフォルテッシモが鳴らされる事に由来しています。これは居眠りをする聴衆の目を覚まさせようとしたユーモア好きのハイドンならではの逸話ですが、全体に活き活きとした生命力に溢れた名曲です。ラヴェルのピアノ協奏曲はジャズやブルースの影響を感じさせる軽妙で快活な第1、第3楽章を挟んで、第2楽章は深い叙情と清らかさを持ったラヴェルの全作品中、最も美しい楽章として知られています。ラヴェルの個性が最大限に発揮された傑作です。ベルリオーズの交響曲「イタリアのハロルド」はバイロンの長篇詩「チャイルド・ハロルドの巡礼」によっていますが、彼の自叙伝的性格を持ち合わせていると言われていています。独奏ヴィオラが「ハロルドの主題」を表し、ロマン性の強い巧みなオーケストレーションが魅力の名曲です。今回は、ト長調の名曲をたっぷりお聴きください。（中川）

ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685~1750):

ブランデンブルク協奏曲第4番ト長調BWV.1049

ダヴィード・オイストラフ (ヴァイオリンと指揮) フィンランド放送交響楽団
(1970.5.14 ハウス・オヴ・カルチャーでのLive)

フランツ・シューベルト (1797~1828):

ピアノ・ソナタ第18番ト長調 D.894 “幻想” ~ 第1楽章から、第3楽章から

内田光子 (ピアノ)
(2001.12.11 サントリーホールでのLive)

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン (1732~1809):

交響曲第94番ト長調“驚愕” Hob.I:94 ~ 第1楽章、第2楽章、第4楽章

リツカルド・ムーティ指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(2005.4.30 ウィーン・ミュージクフェラインホールでのLive)

*** 休憩 ***

モーリス・ラヴェル (1875~1937):

ピアノ協奏曲ト長調

マルタ・アルゲリッチ (ピアノ)
小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1982.6.22 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

ハクトル・ベルリオーズ (1803~1869):

交響曲“イタリアのハロルド”ト長調 (ヴィオラ独奏付き) op.16

~ 第1楽章から、第3楽章、第4楽章

ピンカス・ズーカーマン (ヴィオラ)
シャルル・デュトア指揮NHK交響楽団
(1997.12.17 NHKホールでのLive)